血液免疫病学ニュースレター

Vol. 42 ｜ 2026 年 7 月 29 日

【発行元】 東北大学病院　血液内科・リウマチ膠原病内科
Address: 〒 980-8574　仙台市青葉区星陵町 1-1
Tel: 022-717-7165 / Fax: 022-717-7497
血液内科 HP: http://www.rh.med.tohoku.ac.jp/
リウマチ膠原病内科 HP: https://www.tusmdcir.med.tohoku.ac.jp/

巻頭言

平素より当教室に格別のご高配を賜り，心より御礼申し上げます．本号は，張替秀郎教授のご退職に伴い，私，藤井が巻頭言を担当させていただきます．

本年春は，当教室にとって大きなイベントが続きました．3 月には張替教授の退職記念式典を執り行い，4 月には第 123 回日本内科学会総会・講演会を無事終えることができました．いずれも多くの先生方，OB・OG の皆様のお力添えがあってこそであり，感謝申し上げます．

また 4 月に入り，新しい血液内科，リウマチ膠原病内科ともに医局員を迎えております．先日の第二内科同窓会 100 周年記念の企画にて，張替先生より，旧第二内科第一研究室時代に始まる血液内科・リウマチ膠原病内科の歩みについてお話を伺う機会がありました．長い年月の中で，数多くの優れた臨床家，研究者を育成し，東北の医療と世界の医学を支えてきた教室の歴史にあらためて触れ，その重みを深く感じました．我々が今日，診療，研究，教育に取り組めるのも先人のご尽力と，同門の先生方の変わらぬご支援の積み重ねの上にほかなりません．その歴史と志を受け継ぎ，今後も優れた臨床家，研究者の育成に力を尽くしてまいりたいと存じます．教室の伝統を守るだけでなく，時代の変化に応じて新たな挑戦を重ねながら，血液内科，リウマチ膠原病内科のさらなる発展につなげていきたいと考えております．

さらに 7 月には，血液内科の新教授として福原規子先生が決まり，新たな体制が動き始めました．教室にとって大きな節目となるこの時期に，私どもも力を合わせて歩みを進めてまいります．OB・OG の先生方におかれましては，今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう，何卒よろしくお願い申し上げます．

（藤井　博司）

【目 次】

巻頭言　…　1
教授就任挨拶　…　2
張替秀郎教授　退職記念祝賀会　…　3
新入局員紹介　…　4
学位報告　…　5-6
学会報告　…　7-12
人事異動　…　13
業績報告　…　14-17

教授就任挨拶

教授　福原　規子 先生〔東北大学大学院医学系研究科血液内科学分野〕



同門の先生方におかれましては，平素より東北大学血液内科の診療，研究，教育ならびに教室運営に多大なるご支援を賜り，心より御礼申し上げます．

このたび，令和８年７月１日付で東北大学大学院医学系研究科　血液内科学分野　教授を拝命いたしました．身に余る重責ではございますが，張替先生をはじめ，これまで教室を築き，支えてこられた先生方の歩みを大切に受け継ぎ，教室のさらなる発展に力を尽くしてまいります．

血液内科を取り巻く環境は大きく変化しています．分子標的治療，抗体医薬，二重特異性抗体，CAR-T 細胞療法をはじめとする細胞療法，ゲノム医療などの進歩により，診療の選択肢は大きく広がりました．一方で，治療はますます複雑化し，大学病院と関連病院，地域医療機関がより密に連携しながら，患者さん一人ひとりに適切な医療を届ける体制が重要になっています．

東北地方の血液診療を支えていくためには，大学だけでなく，各地域で日々診療に尽力されている同門の先生方との連携が何より重要です．診療体制の充実，臨床研究や治験の推進，若手医師の教育と人材育成を通じて，東北全体の血液医療の質をさらに高めていきたいと考えております．





若い先生方が血液内科の魅力を感じ，臨床・研究の両面で成長できる教室をつくることも，私たちの大切な使命です．そのためには，大学での教育に加え，関連病院でのご指導や，同門の先生方からの温かいご支援が不可欠です．今後とも，若手医師の育成にお力添えを賜れますと幸いです．

まだまだ微力ではございますが，同門の先生方と力を合わせ，東北大学血液内科が東北の血液医療を支える基盤であり続けるとともに，全国，そして世界に向けて発信できる教室となるよう努めてまいります．

今後とも変わらぬご指導，ご支援を賜りますよう，何卒よろしくお願い申し上げます．

令和８年７月
東北大学大学院医学系研究科　血液内科学分野
教授　福原　規子

張替秀郎教授　退職記念祝賀会



春の訪れを感じる暖かな陽気に恵まれた３月 28 日，江陽グランドホテルにおいて，東北大学大学院医学系研究科血液内科学分野張替秀郎教授の退職記念祝賀会が執り行われました．当日は，学内外より多数の先生方ならびに関係者の皆様にご臨席いただき，長年にわたり本学および当科の発展に多大なるご尽力を賜った張替教授のご功績を振り返る，盛会かつ温かな会となりました．

第二内科同窓会副会長田中哲洋教授の開会の辞に続き，ご来賓の先生方よりご祝辞を賜りました．冨永悌二東北大学総長ならびに石井直人医学部長をはじめとして，張替教授が本学における診療・研究・教育の発展に果たされてきた大きな役割，また大学全体に対する多大な貢献について，深い敬意と感謝のお言葉を頂戴しました．さらに，日本血液学会総会の歴代理事長を務められた松村到近畿大学学長や高折晃史京都大学教授，そして赤司浩一九州大学副学長からは，血液学領域における張替教授の学術的功績，国内外での研究活動，そして次世代を担う多くの人材を育成してこられた歩みについて，数々の思い出とともにご紹介いただきました．ご祝辞の随所には，教授の温厚なお人柄や，診療・研究に対する真摯な姿勢を偲ばせるエピソードも交えられ，会場は終始，感謝と敬意に満ちた雰囲気に包まれました．



久方ぶりに再会された同門の先生方，かつて当科で研鑽を積まれた先生方，また現在の教室員や関係者が各テーブルで歓談されました．張替教授を囲みながら，これまでの教室の歩みや診療・研究の思い出，若手時代のエピソードなどが語られ，世代を越えて交流を深める貴重な時間となりました．

式典の後半では軽快な音楽に乗って張替先生のこれまでの歩みが写真で紹介されました．学究肌の反面，チョイ（かなり？）悪オヤジ風にサーフィンに興じる姿や奥様との大型バイクでのツーリング姿など日頃は想像もつかない張替先生の姿に会場は大盛り上がりでした．また医局での風景では出席した先生方の若き日の姿が大画面で映し出され，会場のあちらこちらで歓声が上がったり，ため息がもれたりしていました．

祝賀会の終盤には，張替教授より退官にあたってのご挨拶をいただきました．これまで支えてこられた多くの先生方，同僚，教室員，関係者への感謝に加え，教室の歴史を振り返りながら，今後の当科の発展と若い世代への期待を込めた温かいお言葉が述べられました．長年にわたり診療・研究・教育に尽力されてきた先生の歩みを象徴するものであり，参加者一同，深い感銘を受けました．

終始和やかな雰囲気で会は進行して皆様話は尽きないようでしたが，同窓会世話人代表の道又勇一先生の閉会の挨拶で祝賀会はお開きとなりました．参加者の皆様はまだまだ名残惜しいようで，三々五々夜の街に消えていきました．消息筋からの情報によると，日本血液学会関係のご来賓の先生方は場所を国分町に移して，張替先生を囲んで二次会，三次会と深夜まで宴は続いたとのことです．



本式典の開催にあたり，ご多忙の中ご出席くださいました皆様，また準備･運営にご協力くださいました関係各位に，実行委員会一同，心より御礼申し上げます．張替教授の今後ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げるとともに，先生が築かれた伝統と精神を受け継ぎ，当科のさらなる発展に努めてまいります．

（東北福祉大学　石澤　賢一）

新入医局員紹介

藤田菜々子　先生
〔血液内科〕



本年度より東北大学病院に赴任してきました，藤田菜々子と申します．2018 年度に東北大学を卒業し，地元である秋田県の大曲厚生医療センターで初期臨床研修，その後秋田大学血液内科の医局へ所属し，秋田大学病院, 平鹿総合病院で後期研修を行いました．このたび宮城県へ移動することとなり，医局を移ってお世話になっております．秋田の市中病院とは違う患者層の方が多く，慣れないこともありますが，これまでの経験を活かしつつ新たな知見を広められたらと思います．イヤイヤ期に差し掛かった娘の子育てにも日々奮闘中であり，ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが，何卒よろしくお願い申し上げます．

藤田　健資　先生
〔血液内科〕



2026 年 4 月より赴任いたしました藤田健資です．工学部で医工学研究に携わり，博士号取得後，再受験を経て医学の道に進みました．いわば「人生二周目」の医師ですが，遠回りをしてきた分，異なる分野で得た視点や研究への姿勢を日々の診療にも活かしていきたいと考えています．石巻赤十字病院，東北医科薬科大学病院で多くの症例を経験し，臨床医としての基礎を大切にしてまいりました．大学病院では，悪性リンパ腫，白血病，多発性骨髄腫に加え，造血幹細胞移植や CAR-T 細胞療法など，専門性の高い血液診療を一つずつ深めてまいります．また，血液疾患に限らず全身を診る視点を忘れず，患者さん一人ひとりに誠実に向き合いたいと考えています．今後は臨床で得た疑問を大切にし，研究や教育にもつなげられるよう努めてまいります．先生方から多くを学び，少しでも医局に貢献できるよう精進いたします．どうぞよろしくお願いいたします．

鈴木　爽天　先生
〔血液内科〕



今年度より入局いたしました，鈴木爽天と申します．出身は茨城県笠間市で，茨城高等学校卒業後に，2018 年に東北医科薬科大学へ進学いたしました．大学生活を通じて仙台の魅力に惹かれ，2024 年より仙台市立病院にて 2 年間の初期研修を行いました．血液内科に興味を持ったきっかけは，大学時代に，急性前骨髄性白血病の細胞株を用いた分化誘導に関する研究に携わったことです．基礎研究を通して，分子レベルの異常が病態や治療に直結する血液疾患の奥深さに魅力を感じました．入局して間もなく，知識・経験ともに不足しておりますが，上級医の先生方のご指導を仰ぎながら，一日でも早く皆様のお力になれるよう精進してまいります．体格は当院血液内科の中で 1 番大きく，風格だけは一人前ですが，中身はまだまだ未熟ですので，お手柔らかにご指導いただけますと幸いです. ご迷惑をおかけすることも多いかと存じますが，何卒ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます．

新澤　智行　先生
〔リウマチ膠原病内科〕



2026 年 4 月より専攻医 1 年目として研修させていただいております新澤智行と申します．出身は宮城県仙台市で，2024 年 3 月に青森県の弘前大学を卒業し，4 月より大崎市民病院で 2 年間初期研修を行いました．学生時代より全身を診察できる内科医になりたいと考えておりました. 初期研修医 1 年目の秋に，当院開催の血液免疫病学セミナーに参加した際に，藤井先生をはじめとした先生方のお話を聞き，診療や病態の奥深さを感じ，東北地方で不足しているリウマチ膠原病疾患の診療に携わりたいと考え，専門の道に進むことを決めました．初期研修を終えたばかりの私には，膠原病診療は目から鱗の連続で，指導医の先生方にサポートいただきながらではありますが，とても充実した研修生活を送ることができています．一日でも早くみなさんのお役に立てるよう研鑽を積んでまいります．引き続きご指導よろしくお願いいたします．

学位報告

内堀　雄介　先生

「酸素依存的に制御される活性型ビタミン B6 を介した細胞老化制御機構の解明」

私は「酸素依存的に制御される活性型ビタミン B6 を介した細胞老化制御機構の解明」というテーマで，本橋ほづみ教授の研究室にて研究を行い，学位論文を提出いたしました．

私たちは酸素を利用することで効率的なエネルギー産生を享受し，複雑な生命活動を支えるエネルギー的基盤を確立してきました．しかし，その代謝過程で生成する活性酸素種はタンパク質・脂質・核酸に酸化的損傷を与え，がん・動脈硬化・神経変性疾患など多様な疾患に関与します．したがって，酸素濃度を感知して酸化ストレスを適切に制御する機構は重要な防御システムであり，その中心的役割を担う KEAP1-NRF2 制御系が広く知られています．また，酸素に関連する生体応答として，2019 年にノーベル生理学･医学賞を受賞した低酸素応答に関与する PHD（prolyl hydroxylase domain）-HIF（Hypoxia Inducible Factor）制御系も代表的な酸素応答系として知られており，造血・血管新生・炎症・アポトーシス・嫌気性解糖などを介して低酸素への応答・適応機構として重要な役割を果たしています．

近年，本橋先生の研究室では新たな酸素応答機構として PNPO-PLP 制御系が見出されました．PNPO（Pyridoxamine 5’-phosphate oxidase） は， ビタミン B6 の活性化を触媒して活性型ビタミン B6（Pyridoxal 5’-phosphate：PLP）を産生する酵素であり，基質として分子状酸素（O_2）を必要とします．そのため，PLP 量は酸素濃度に応じて調整されます．急性の低酸素状態では PHD-HIF 制御系が応答し，安定化した HIF タンパク質が迅速に転写を調節して解糖系促進などの代謝変化をもたらします．一方，慢性の低酸素状態では PNPO 活性の低下により PLP が徐々に減少し，PLP 依存性代謝が抑制されます．慢性低酸素下における炎症の増悪と遷延化が，従来の PHD-HIF 制御系ではなく PNPO-PLP 制御系を介して生じることが報告されており，本制御系は従来とは異なる新規の酸素応答メカニズムとして注目されています．

その生理的・病理的役割の解明は今後の重要な課題であると考え，私は特に細胞老化との関連に着目して研究に取り組み，本学位論文としてまとめることができました．

最後に，本研究を遂行するにあたり，医化学分野の本橋ほづみ教授ならびに血液内科学分野の張替秀郎教授には，研究に取り組む貴重な機会を賜るとともに，日頃より格別のご指導とご助言をいただきましたことに，心より深く御礼申し上げます．また，医化学分野（現・山形大学生化学・分子生物学講座教授）の関根弘樹先生には，研究全般にわたり熱心かつ丁寧なご指導と多大なるご支援をいただきましたことを，心より感謝申し上げます．さらに，研究室の諸先生方をはじめ多くの方々から賜りました温かいご支援とご高配に，改めて深甚なる謝意を表します．

櫻井　一貴　先生

「CD4 陽性 T 細胞における内因性ヘム合成の果たす役割」

私はこのたび，博士論文として「CD4 陽性 T 細胞における内因性ヘム合成の果たす役割」を提出し，大学院博士課程を修了いたしました．

T 細胞は，生体内で抗原刺激を受けて活性化すると，増殖や分化に伴い，その代謝状態を大きく変化させます．エネルギー代謝は酸化的リン酸化から解糖系へと移行し，アミノ酸代謝や脂質代謝も T 細胞機能の制御に重要であることが知られています．一方で，T 細胞は活性化時にトランスフェリン受容体の発現を上昇させ，鉄代謝を変化させることが報告されていましたが，取り込まれた鉄がどのような代謝経路を介して T 細胞機能に寄与するのかについては，十分に明らかではありませんでした．

そこで本研究では，鉄を構成元素として必要とする代表的な代謝物であるヘムに着目し，T 細胞活性化における内因性ヘム合成の役割を検討しました．CD4 陽性細胞特異的にヘム合成酵素の一つであるコプロポルフィリノーゲン酸化酵素（CPOX）を欠損するマウスを作製し，対照マウスと比較して解析を行いました．その結果，CPOX を欠損したナイーブ CD4 陽性 T 細胞では，活性化刺激後のヘム合成が抑制されるとともに，細胞増殖が低下することが確認されました．また，網羅的遺伝子発現解析では，対照群で認められる解糖系関連遺伝子群の発現上昇が，CPOX 欠損群では抑制されていました．さらに，培地中にヘミンを添加することで，増殖障害や解糖系関連遺伝子の発現低下が改善したことから，T 細胞活性化においてヘム合成が重要な役割を担うことが示唆されました．本研究での知見が臨床的意義を有するかどうか検討する目的に自己免疫性腸炎モデルおよび移植片対宿主病（GVHD）モデルを作成し，CPOX 欠損 T 細胞を用いた場合には疾患重症度の改善が認められ，ヘム合成経路が難治性炎症性疾患の新たな治療標的となる可能性が示されました．

本研究を進めるにあたり，当科の張替秀郎副学長，加藤浩貴講師をはじめ，医局の先生方，スタッフの皆様には多大なるご指導とご支援を賜りました．また，臨床免疫学分野の藤井博司教授，郷野辰幸助教には日々の議論を通じて多くのご助言をいただきました．さらに，アドバイザー教員であった落合恭子准教授をはじめとする生物化学分野の先生方には実験手技に至るまで丁寧にご指導いただき，病態液性制御学分野の阿部高明教授，柏木仁美様には代謝解析に関して，モドミクス学分野の魏范研教授には質量分析に基づくヘム濃度測定に関して，多大なるご協力をいただきました．この場をお借りして，心より御礼申し上げます．

病棟の都合により実験に専念できる期間が 2 年 8 か月と短縮してしまったこと，また，動物実験施設の移動に伴い一時的に本研究ができない時期が発生したため，後輩に引き継ぐためのマウスモデルを作成し表現系の確立まで行ったこともあり，思うように研究ができない時期もありました．また，予算の関係上，網羅的解析が十分に提出できなかったことも含め，決して十分とはいえない研究結果となってしまいましたが，そのような中で，第 49 回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会や第 3 回赤血球研究シンポジウムで発表させていただき，両学会から奨励賞をいただいたこと，アメリカ血液学会で口演演題として採択されたことからは，本研究の意義を一定程度評価していただけたものと感じております．

最後に，本研究に関わってくださったすべての方々，そして本研究のために命を懸けてくれた多くのマウスに深謝申し上げます．大学院で得た経験と学びを，今後の診療および研究活動に活かしていきたいと存じます．

第 123 回日本内科学会総会・講演会

医学生・研修医・専攻医のための日本内科学会ことはじめ 2026

＜日本内科学会総会・講演会＞

このたび開催されました第 123 回日本内科学会総会・講演会において，張替秀郎先生が会長，私，藤井が準備委員長，東北医科薬科大学の市川聡先生がことはじめ実行委員長を拝命し，当教室として学会運営に深く関わる機会を得ました．通常のプログラムにつきましては，理事会での審議を経て演者や企画が決定されてまいりましたが，その中で当医局は，パネルディスカッション「近代医療のゲームチェンジャー」，若手企画「ことはじめ」，今回より新たに設けられた地方優秀演題セッション，さらには開催地の趣をお伝えする東北スイーツの選定に至るまで，多方面にわたり準備と運営に携わりました. 学術的な充実はもとより，開催地ならではの温もりや魅力を感じていただける総会を目指し，教室員一同，アイディアを出して準備を進めてまいりました．

やはり強く印象に残りましたのは，「ことはじめ」にみなぎる若い力であります．今回は過去最多となる 550 題の演題が集まり，会場には終始，若手医師・医学生の熱意と活気があふれておりました．優秀演題の発表では，受賞者名が読み上げられるたびに各所で歓声が起こり，互いの努力と成果をたたえ合う姿が随所に見られました．内科学の未来は，まさにこのような若い情熱に支えられていくのだと，あらためて実感いたしました．

また，今回初めて実施された地方優秀演題セッションも，たいへん意義深い企画でありました．全国各地から選りすぐられた演題が一堂に会し，各地域を代表するエキスパートの先生方からは，専門領域にとどまらない広い視野から質問が寄せられました．発表した若い先生方も，そうした問いに対して落ち着いて，かつ的確に応答し，将来の内科学を担う人材の厚みを感じさせるものでした．高度な専門性に加え，内科学全体を見渡す総合力の大切さを示す象徴的な場面であったように思います．

今回の総会のテーマは「包摂する内科学」でありました．本総会は，内科学全般の進歩を参加者が広く共有し，それぞれの診療や研究をあらためて見つめ直す機会となりました．同時に，若手医師にとりましても，今後の診療と研究に向かう強い動機づけを得る場になったと感じております．内科学の多様な領域を包み込み，世代を超えて学び合うという理念が，今回の総会ではさまざまな企画を通して具体的に結実していたように思われます．

このように無事に総会を終えることができましたのも，教室員一同をはじめ，東北大学病院内科系診療科の先生方，そして OB・OG の先生方のお力添えの賜物です. この場をお借りして, 心より感謝申し上げます.

（藤井　博司）

諸先生方のご指導のもと，第 123 回日本内科学会総会での発表の機会を頂きましたのでご報告させていただきます．

4 月 10 日から 3 日間に渡り開催され，初日こそ開催地ならではの通り雨に足止めされる一幕もありましたが，メインイベントでもあることはじめが予定された 2 日目は，内科医学会を担うであろう若手の学生，研修医の先生方を後押しするかのような晴天に恵まれた 1 日となりました．

そのようななか「膠原病に伴う自己免疫性自律神経障害を想定した 3 例」との演題で，重篤な自律神経障害を特徴とした症例について，診断に有用と考えられる臨床的特徴や治療反応性（いずれの症例も数ヶ月に及ぶ難治な経過を辿ったこと）を中心に発表させて頂きました．

発表内容については当科領域のほか，脳神経内科や消化器内科など複数の診療科にも関連するテーマであったと考えており，会場の構成，タイムテーブルの都合から膠原病領域以外の先生方に聴講いただくことが叶わなかった点は残念ではありましたが，座長の労をお取り頂いた北里大学の山岡先生はじめ，フロアの先生方から共有頂いた貴重な診療経験については，明日からの診療に活きるもの（活かすべきもの）と考えております．

末尾となりますが，会長を務められた張替先生はじめ，演題提出を後押ししてくださった藤井先生，開催期間中の会場運営や座長を務められた市川先生をはじめとした諸先生方にこの場を借りて御礼申し上げます．

（星　　陽介）

学会報告（続き）

第 122 回日本内科学会講演会にて発表いたしました「炎症性腸疾患に併発した造血器腫瘍に対し，同種造血幹細胞移植を行った 4 例」の演題で，第 39 回内科学会奨励賞を受賞し，4 月 10 日に開催された第 123 回日本内科学会総会の授賞式に参加いたしました．炎症性腸疾患は HCT-CI の一項目であり，同種造血幹細胞移植におけるリスク因子とされますが，当科で経験した 4 例中 3 例で血液疾患の長期寛解に加え，炎症性腸疾患の治癒が得られました．支持療法の進歩による感染症管理が非再発死亡抑制に繋がったと考えており，移植による造血・免疫システムの再構築が炎症性腸疾患に対しても有効である可能性が示唆されました．本検討にあたり，張替秀郎副学長，福原規子准教授をはじめ，医局の先生方，スタッフの皆様に多大なるご指導を賜りました．この場をお借りして深く御礼申し上げます．今回の受賞を励みに，今後も臨床と研究の両面に真摯に取り組んでまいります．



（櫻井　一貴）

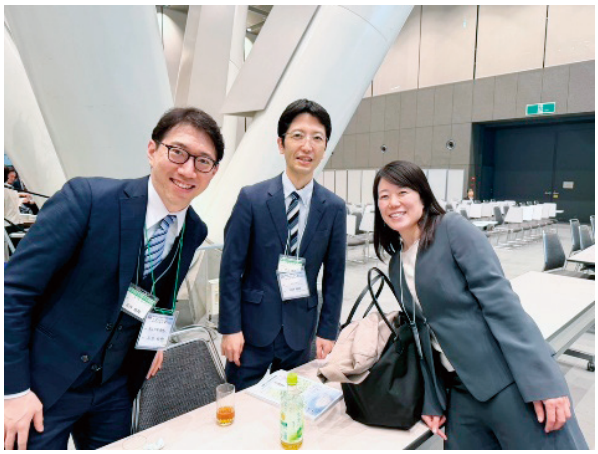
〇発表演題：

星　　陽介：（142）膠原病に伴う自己免疫性自律神経障害を想定した 3 例

＜医学生・研修医・専攻医のための日本内科学会ことはじめ＞

今回は血液内科学分野教授の張替先生が会長を務められ，リウマチ膠原病内科科長兼臨床免疫分野教授の藤井先生が準備委員長を務められました．昨年の学会が終了後から学会会期中のイベントについて準備をしてまいりました．大盛況のうちに会が終了し，我々医局員も会がつつがなく進行するよう委員として，サポートさせていただきました．

リウマチ膠原病内科からはことはじめに，3 人の学生さんが参加し，今年も予演会から白熱した討論が行われ，本番でもよく質問に答えて内科学的な考察の仕方について学んでもらえたかと思います．惜しくも優秀賞の受賞はなりませんでしたが，各症例を通じてリウマチ膠原病疾患の深い考察や発表の方法を学べたと思います．今年で教育担当として，ことはじめに参加して，2 年目になりますが，レベルの高い発表が多く，学会内でも最も注目されているイベントの一つであると感じました．





ことはじめの講演会セッション③では，私が米国留学中に大変お世話になったエモリー大学救急科／国境なき医師団会長の中嶋優子先生にご登壇いただき，若手内科医に世界へ羽ばたいた経緯や紛争の中で被害を受けている人たちを救うべく世界を駆け回る貴重な話をリアルな写真や動画と共にお話しいただきました．講演後も質問のための長蛇の列ができて講演の印象が

強かったことを感じ，ご講演いただけて良かったと感じました．

１年に渡り準備してきた学会でしたが，無事大盛況の中に終えることができました．ご参加いただいた皆様，ご協力いただいた皆様ありがとうございました．

（石井　悠翔）

今年の日本内科学会総会「ことはじめ」では，血液内科から医学部６年生の宮本君，鈴木君，押田さんの３名に発表をしていただきました．３人とも限られた時間の中で，スライド作成から発表練習まで本当によく努力しており，当日の発表も非常に素晴らしいものでした．年々このセッションは参加者が増え，発表内容も洗練されてきており，優秀演題賞を受賞することは簡単ではありません．そのような中で，小野寺先生のご指導のもと，宮本君が優秀演題賞を受賞したことは大変素晴らしいことだと思います．

一人の患者さんについて深く掘り下げ，文献を調べ，自分たちなりに考察を組み立てていく経験は，通常の授業や講義ではなかなか得られないものです．実際に症例と向き合い，「なぜこの経過をたどったのか」「他にどのような可能性があったのか」を考え続ける過程そのものが，医師としての基礎を作っていくのだと思います．今回の３人も，高次修練で血液内科を回る前から準備を進め，期間中も病棟で相談を重ねながら真摯に症例に向き合っていました．その姿勢は発表内容にもよく表れていたと思います．この経験自体が，今後の医師人生において大きな糧になることを願っています．

また，夜の懇親会に今回初めて参加させていただきましたが，非常に印象的でした．発表を終えた学生や研修医たちが，達成感と安堵感の入り混じった表情で語り合い，それを支える指導医たちも交えて楽しんでいる姿を見ていると，それぞれが積み重ねてきた努力や関係性が垣間見えるようでした．若い先生たちが真剣に症例に向き合い，悩み，成長していく姿には，年甲斐もなく「青春だな」と感じ，少し感動してしまいました．

今回改めて感じたのは，こうした場は発表者だけのものではなく，指導する側も症例の見方や考え方，伝え方について多くを学ばされるということです．若い先生たちの新鮮な視点や熱意に触れることで，自分自身も初心を思い出させてもらう貴重な機会となりました．

（八田　俊介）



2026 年 4 月 11 日に東京で開催された「医学生・研修医・専攻医の内科学　ことはじめ 2026」において，「臍帯血移植後早期に再発した MLL::AF4 陽性前駆 B 細胞性急性リンパ性白血病に対して CAR-T 療法が奏功した一例」というタイトルで発表いたしました．本発表では，同種移植後の CAR-T 療法は抗腫瘍効果が高まるのではないかという考察に対し，多角的な質問を頂き非常に活発な議論を交わすことができました．初めての学会発表で緊張していたことに加え，発表中にパソコンのタイマーが止まるというアクシデントもあり，正直なところ発表中の記憶は殆どありませんが，なんとか無事に発表を終えることができました．また，本発表を高く評価していただき優秀演題賞を受賞することができました．受賞者発表の瞬間は会場中が熱気と感動に包まれ，大変良い経験となりまし



た．最後になりますが，発表にあたり手厚いご指導賜りました，小野寺晃一先生並びに血液内科の先生方に深く御礼申し上げますと共に，発表練習に付き合ってくれた鈴木君・押田さんにもこの場を借りて感謝申し上げます．

（学生：宮本　航成）

○発表演題（学生）：

押田　桃香：（253）劇症型再生不良性貧血に対して Post-transplant cyclophosphamide を用いた HLA 半合致末梢血幹細胞移植を施行した一例

鈴木　　翼：（277）完全房室ブロックを生じた心臓浸潤びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫の一例

宮本　航成：（304）臍帯血移植後早期に再発した MLL::AF4　陽性前駆 B 細胞性急性リンパ性白血病に対して CAR-T 療法が奏功した一例

小林　優希：（390）ANCA 関連血管炎に対しメポリズマブ治療中にアレルギー性気管支肺アスペルギルス症を呈した一例

道垣内理穂：（404）アニフロルマブ使用中に妊娠が発覚して播種性帯状疱疹を発症した全身性エリテマトーデスの一例

中西　進斗：（443）心筋障害を合併した抗ミトコンドリア抗体陽性筋炎の一例

The 67th ASH Annual Meeting and Exposition

2025 年 12 月 6 日から 10 日にかけて，米国フロリダ州オーランドにて開催された第 67 回アメリカ血液学会（American Society of Hematology：ASH）年次総会に参加しました．本学会は血液学分野における世界最大規模の国際学会であり，基礎研究から臨床研究まで幅広い最新知見が共有される場です．

当科からは私が参加・発表し，大学院で取り組んだ研究テーマについて口演発表を行いました．初めての海外渡航であることに加え，渡航初日に羽田空港で長時間足止めされるなどのトラブルもありましたが，大きな問題なく発表を終えることができました．質疑応答では質問内容を理解できる場面が多かったものの，即座に英語で的確に応答する難しさを実感しました．論文を読んで理解する段階から，研究内容を自らの言葉で発信し議論できる段階へと成長することの重要性を，強く認識する機会となりました．学会期間中は，プレナリーセッションをはじめ，口演発表やポスター発表にも積極的に参加し，最先端の基礎研究，臨床研究，治療成績や疫学研究など，世界各地からの多様な研究成果に触れることができました．非常に刺激的で学びの多い学会参加となりました．



今回の経験を今後の研究および臨床活動に活かし，引き続き研鑽を積んでまいります．今後ともご指導ご鞭撻のほど，よろしくお願い申し上げます．

（櫻井　一貴）

○発表演題：

Kazuki Sakurai：（203）Cell intrinsic heme synthesis supports glycolysis for activation of naive CD4+ T cell

第 48 回 日本造血・免疫細胞療法学会総会

2026 年 2 月 27 日から 3 月 1 日にかけて，東京国際フォーラムで日本造血・免疫細胞療法学会が開催されました．東北大学からは，張替秀郎先生が座長，小野寺晃一先生，手島航先生，渡邉瑞生先生，李美玲看護師，黒崎が演者として参加いたしました．私は，「臍帯血移植後の急性喉頭蓋炎に対してステロイド治療が奏効した ATLL の一例」というタイトルで発表いたしました．本発表の最大の論点は，急性喉頭蓋炎が急性 GVHD によるものか，感染症によるものかという点でした．多くの先生方からご意見をいただきながら何度も検討を重ね，当日の質疑応答では，会場の皆様へ納得していただけるように回答することができました．参加された先生方の発表も拝聴しましたが，興味深い発表と活発な質疑応答を交わしており，自分も先生方に追いつけるよう精進したいと感じました．発表以外にも様々なセミナーへ参加いたしました．特に印象に残っているのは，「Meet the Expert」のセッションで，がん・感染症センター都立駒込病院の土岐典子先生と対話する機会をいただいたことです．そこでは，血液内科の生活や移植後長期フォローアップ外



来での取り組みについてお話を伺いました．さらに参加者を交えたディスカッションでは，様々な見解を学ぶことができ，非常に有意義な時間となりました．今回参加した経験を今後の医師としての人生に生かしてまいります．最後にはなりますが，発表へのご指導をいただきました中川諒先生始め，血液内科の先生方へ深く御礼申し上げます．

（学生：黒崎　円花）

○発表演題

渡邉　瑞生：（P7-2）再発難治 PTCL における臍帯血移植成績の検討
黒崎　円花（学生）：（P27-6）臍帯血移植後の急性喉頭蓋炎に対してステロイド治療が奏功した ATLL の一例
手島　　航：（O19-4）同種造血幹細胞移植後におけるレテルモビル投与下での CMV 再活性化と再投与の意義
小野寺晃一：（O27-3）AML-MRG における VAF の影響と同種移植の意義
李　　美玲：（看 O2-4）同種造血細胞移植患者の体験・情報ニーズに基づく患者指導に関する検討

第 69 回 日本リウマチ学会総会・学術集会

入局して今年で早 5 年（医師 7 年目）となりますが，日本リウマチ学会は今回が 4 回目の参加，福岡を訪れるのもかれこれ 4 回目となりました．規模の大きさや格式高さ，一つ一つの口演発表の質の高さに気圧された初参加の記憶も薄れ，今年は伸び伸びと学会を楽しむことができました．学年があがるとタスクも増え，学会発表に全力投球とも行かぬ中，準備も完全ではないスリルと謎の高揚感が功を制したように思います．昼に現地着で真っ先に聴講した本会会長の渥美教授の演題は，数々の素晴らしい業績に基づきながらも同時に親しみやすく人間味のある内容で，この時点で心は腹八分目くらいの満足を得られました．満足感に呆けてランチョンセミナーで食いっぱぐれてしまった私は，一足先にポスタービューイングに足を運びましたが，これが大正解でした．今年は北海道大学が主幹ということで，会場には北海道の名物お菓子と引き換えできるスタンプラリーが開催されており，ほとんど誰もいないポスター会場で颯爽とスタンプを回収することができました．福岡に居ながら北海道のお菓子を堪能するというのも滅多に無い贅沢な経験で，その後

にお菓子交換所に押し寄せた参加者たちの長蛇の列を見て，一層満足しました．会全体を通して，大規模臨床試験や基礎研究に裏打ちされたソリッドなエビデンスも然ることながら，目の前の患者さんを救えた／救えなかったという臨床医であれば誰しもが心に刻んでいるナラティブを感じられる演題も多い印象で，明日からの診療に向き合う背筋が伸びる思いでした．学会終わりは医局員と飲み会というのが常ですが，今年はあいにく都合がつかず，前々から気になっていた資さんうどんを１人堪能してきました．近所のスーパーで販売されている同店の冷凍うどんにドはまりしたというのが事の発端でしたが，冷凍うどんのクオリティの高さを再認識させられました．

（片倉　世雄）



○発表演題：

石井　悠翔：（9-5）Improved Prognosis and Reduced Glucocorticoid Dose in Connective Tissue Disease-Associated Pulmonary Arterial Hypertension without Systemic Sclerosis by Combination Therapy with Immunosuppressants and Vasodilators

片倉　世雄：（32-5）Age-dependent PET-CT patterns and relapse rate indicate age 60 as a boundary between Takayasu arteritis and giant cell arteritis in Japan

人事異動

昨秋～今夏の当科および関連病院の人事異動についてお知らせ致します.

【内部】

張替　秀郎　先生	東北大学病院長・血液内科学分野　教授　→
	東北大学　理事･副学長，東北大学メディカルメガバンク機構　教授･機構長（血液内科兼務）
福原　規子　先生	血液内科学分野　准教授　→　血液内科学分野　教授，輸血・細胞治療部　部長
内堀　雄介　先生	血液内科学分野　大学院生　→　血液内科　助教
櫻井　一貴　先生	血液内科学分野　大学院生　→　血液内科　医員
安部　宇明　先生	血液内科　医員（大学院生）　→　血液内科学分野　大学院生

【転入・採用】

中村　嘉詞　先生	大崎市民病院　血液内科　→　血液内科学分野　大学院生
藤田菜々子　先生	平鹿総合病院　血液内科　→　血液内科　医員
久保　龍大　先生	宮城県立がんセンター　血液内科　→　血液内科学分野　大学院生
前田　都秋　先生	仙台医療センター　血液内科　→　血液内科　医員（大学院生）
藤田　健資　先生	東北医科薬科大学病院　内科学第三　専攻医　→　血液内科　専攻医
鈴木　爽天　先生	仙台市立病院　初期研修医　→　血液内科　専攻医
新澤　智行　先生	大崎市民病院　初期研修医　→　リウマチ膠原病内科　専攻医

【転出】

中川　　諒　先生	血液内科　助教　→　留学（Cincinnati Children's Hospital Medical Center）
猪倉　恭子　先生	血液内科　医員　→　退職
李　　尹河　先生	血液内科学分野　大学院生（京都大学）　→　大崎市民病院　血液内科
手島　　航　先生	血液内科　研修登録医　→　岩手県立中央病院　血液内科
成田　　衛　先生	リウマチ膠原病内科　専攻医　→　大崎市民病院　リウマチ科
熊谷　　輝　先生	血液内科　専攻医　→　仙台市立病院　血液内科
小川　瑛史　先生	血液内科　専攻医　→　仙台医療センター　血液内科　専攻医
金　　輝　先生	血液内科　専攻医　→　大崎市民病院　血液内科　専攻医
渡邉　瑞生　先生	血液内科　専攻医　→　宮城県立がんセンター　血液内科　専攻医

【外部】

福原　　修　先生	館腰クリニック
大西　　康　先生	仙台南おおにしクリニック　開業
那須健太郎　先生	なかやま医院　→　山形大学医学部第三内科　助教
高橋　秀典　先生	大崎市民病院 リウマチ科　→　イムス明理会仙台総合病院　内科
鎌田　真弓　先生	宮城県立がんセンター　血液内科　→　山形市立済生館　血液内科
小野　浩弥　先生	留学（Helmholtz Zentrum München）　→　宮城県立がんセンター　血液内科

業績報告

2025 年 11 月から 2026 年 6 月にかけての業績を報告いたします.

（血液内科）

1. Sugiyama K, Narita Y, Nagane M, Mishima K, Terui Y, Arakawa Y, Asai K, Fukuhara N, Yonezawa H, Shinojima N, Aoi A, Nishikawa R. Plain language summary about tirabrutinib in relapsed/refractory primary central nervous system lymphoma. Future Oncol. 2025 Nov ; 21(27) : 3477-3489. PMID : 41170813
2. Zaimoku Y, Yamazaki H, Kanaya M, Hiramoto N, Ishiyama K, Takenaka K, Murata M, Uchida N, Doki N, Yamamoto R, Nishida T, Onodera K, Machida S, Kanda Y, Eto T, Kataoka K, Asada N, Itagaki M, Sakata-Yanagimoto M, Ishimaru F, Onizuka M, Ichinohe T, Atsuta Y, Onishi Y. Loss-Prone HLA Class I Alleles Inform Outcomes of Early Hematopoietic Cell Transplantation in Acquired Aplastic Anemia. Am J Hematol. 2025 Dec ; 100(12) : 2195-2208. PMID : 40910546
3. Sakurai M, Kataoka K, Mizuno K, Mori T, Shirane S, Sakaguchi H, Mori T, Tanaka M, Tokunaga M, Onizuka M, Sakata-Yanagimoto M, Ishikawa J, Katayama Y, Ota S, Sawa M, Kato J, Hasegawa Y, Onodera K, Hattori N, Miyakoshi S, Takayama N, Nishida T, Kato K, Ishimaru F, Atsuta Y, Kanda J, Nakasone H, Terakura S. Risk Factors for and Impact of Pre-Engraftment Syndrome on Outcomes Following Single-Unit Cord Blood Transplantation in Adults. Am J Hematol. 2025 Dec ; 100(12) : 2248-2260. PMID : 41002003
4. Maeda T, Hatta S, Kanba K, Watanabe T, Kiba D, Kawajiri A, Inokura K, Onodera K, Onishi Y, Fukuhara N, Ichinohasama R, Harigae H. Extramedullary blast crisis limited to the lymph nodes in chronic myeloid leukemia with a T/myeloid mixed phenotype. Rinsho Ketsueki. 2025 ; 66(12) : 1560-1565. PMID : 41526260
5. Ichikawa S, Yamato M, Hatta S, Onodera K, Fukuhara N, Ichinohasama R, Harigae H. Mixed-phenotype acute leukemia with trilineage differentiation presenting as a non-leukemic mediastinal tumor. J Clin Exp Hematop. 2025 Dec 24 ; 65(4) : 298-304. PMID : 41161782
6. Yokoyama H, Fukuhara N, Ando K, Iida H, Yamauchi T, Fukuhara S, Izutsu K, Tanoue Y, Yamamoto M, Tozaki H, Takahara E, Shoji S, Mizutani A, Morishita D, Oda RW, Miyake H, Yamamoto N. Phase I Study of Rogocekib in Patients with Relapsed or Refractory Hematologic Malignancies. Blood Adv. 2026 Jan 13 ; 10(1) : 262-272. PMID : 41056522
7. Li B, Kumada K, Shimada M, Shirota H, Tokunaga H, Yamaguchi-Tanaka M, Inoue C, Yamazaki Y, Yamamura A, Furukawa T, Komine K, Ogishima S, Tamahara T, Saito S, Shimizu R, Iikubo M, Yamauchi K, Saito T, Fujimaki SI, Abe Y, Nakamura N, Ota H, Nagami F, Kinoshita K, Nakazawa T, Motohashi H, Ishii N, Ishioka C, Harigae H, Tominaga T, Yaegashi N, Yamamoto M. Establishment and Operation of a New Style Clinical Biobank : The Tohoku University Clinical Biobank. Tohoku J Exp Med. 2026 Jan 15. PMID : 41535009
8. Kumar S, Mateos MV, Ye JC, Atrash S, Magen H, Quach H, Chu MP, Trudel S, Richter J, Rodríguez-Otero P, Chuah H, Gatt M, Medvedova E, Raza S, Yoon DH, Ishida T, Matous JV, Rosiñol L, Onodera K, Scott E, Heuck C, Zhang J, Henninger T, O'Rourke L, Thakkar P, Festa M, Huang L, Zhou J, Takamoto M, Pei L, Lu J, Au N, Krevvata M, Usmani SZ, Cohen YC ; RedirecTT-1 Investigators Study Group. Dual Targeting of Extramedullary Myeloma with Talquetamab and Teclistamab. N Engl J Med. 2026 Jan 1 ; 394(1) : 51-61. PMID : 41358582
9. Muroyama Y, Onodera K, Kawajiri A, Suzuki T, Ichinohasama R. Rare nodal involvement as the initial presentation of lymphomatoid granulomatosis, mimicking metastatic carcinoma. Intern Emerg Med. 2026 Jan ; 21(1) : 321-322. PMID : 41148484
10. Saito Y, Oda T, Nakanishi S, Ota M, Maeda N, Okajima C, Kozuka D, Fukuhara N. Safety profiles in elderly patients with DLBCL on first-line Pola-R-CHP : a claims database study in Japan. Leuk Lymphoma. 2026 Jan ; 67(1) : 135-147. PMID : 41178645
11. Fujimoto A, Maeda T, Doki N, Fukuhara N, Iwaki N, Hiramoto N, Goto H, Miyazaki T, Shiki I, Miyazaki K, Yamaguchi M, Ishida F, Suzuki R. Advances in the treatment and prognosis of aggressive NK-cell leukemia : results from the ANKL22 study. Leukemia. 2026 Feb ; 40(2) : 373-382. PMID : 41501503
12. Izutsu K, Watanabe M, Toubai T, Tsukamoto T, Maruyama D, Kumode T, Fukuhara N, Ogawa N, Satomi N, Nishimura Y, Honda H, Chyla B, Takizawa J. Efficacy and safety of fixed-duration venetoclax plus obinutuzumab in untreated Japanese CLL and SLL : a phase 2 study. Int J Hematol. 2026 Feb ; 123(2) : 225-

232. PMID：41212498
13. Sakurai M, Arai Y, Goto H, Kim H, Masuda K, Kitawaki T, Fujii N, Shimoyama T, Yoshihara S, Kato J, Ara T, Terakura S, Umezawa Y, Nakazawa H, Ando M, Shimura Y, Kanemura N, Onodera K, Nakashima Y, Tanaka H, Atsuta Y, Kataoka K, Kato K. Real-world outcomes of tisagenlecleucel treatment in patients with relapsed or refractory large B-cell lymphomas: a nationwide registry. Cytotherapy. 2026 Mar；28(3)：102042. PMID：41544566
14. Ichikawa S, Fukuhara N, Katsuoka Y, Ishizawa Y, Kamata K, Fukatsu M, Nagao T, Murai K, Yokoyama H, Tamai Y, Ikezoe T, Ichinohasama R, Ito S, Takahashi N, Harigae H. Dismal Outcome of EBV-Positive Nodal T/NK-Cell Lymphoma：A Multicenter Retrospective Study. Clin Lymphoma Myeloma Leuk. 2026 Mar；26(3)：e376-e384. PMID：41391975
15. Makita S, Izutsu K, Mishima Y, Kumode T, Kuroda J, Kanemura N, Fukuhara N, Shimada K, Mori C, Kawasaki A, Miyake T, Maruyama D. Efficacy and safety of subcutaneous mosunetuzumab in combination with lenalidomide and as a monotherapy in Japanese patients with relapsed/refractory follicular lymphoma. Int J Clin Oncol. 2026 Mar；31(3)：456-466. PMID：41526601
16. Satake A, Nagate Y, Miyawaki K, Fujiwara Y, Ota S, Muta T, Rai S, Tsurumi H, Suzuki R, Miyake T, Goto H, Fukuhara N, Sakata-Yanagimoto M, Izutsu K, Nishikori M, Shibayama H, Kumode T, Ennishi D, Shimose T, Inubashiri N, Matsumura I, Akashi K, Kato K. Preliminary analysis of a multicenter study of Pola-R-CHP in untreated Japanese patients with DLBCL (POLASTAR). Int J Hematol. 2026 Mar；123(3)：404-411. PMID：41335368
17. Ichikawa S, Hatta S, Fukuhara N, Harigae H. Decrease in PNH-type Blood Cells after the Cessation of Thrombopoietin Receptor Agonist in a Case of AA-PNH Syndrome. Intern Med. 2026 Mar 17. PMID：41850841
18. Ichikawa S, Hatta S, Onodera K, Fujiwara T, Fukuhara N, Ichinohasama R, Harigae H. Successful cord blood transplantation for a unique mature γδ T-cell leukemia with KMT2A::AFDN translocation. J Clin Exp Hematop. 2026 Mar 31；66(1)：108-110. PMID：41605693
19. Terao T, Kitamura W, Fujino T, Haruyama T, Okazoe Y, Uchida N, Tanaka M, Wake A, Tokunaga M, Kataoka K, Sawa M, Onizuka M, Toyosaki M, Onodera K, Nishida T, Katayama Y, Maeda T, Hasegawa Y, Arai S, Yoshimitsu M, Fukuda T, Ohbiki M, Atsuta Y, Yakushijin K, Ogata M, Nakasone H. Impact of antiviral therapies on survival in patients with HHV-6B encephalitis after cord blood transplantation：a real-world study. Bone Marrow Transplant. 2026 Apr 14. PMID：41981081
20. Arai Y, Ohbiki M, Kurata M, Ota S, Tanaka M, Imada K, Fukuda T, Katayama Y, Doki N, Kanda Y, Sakata-Yanagimoto M, Onodera K, Hiramoto N, Asada N, Ishida T, Uchida H, Uno S, Teshima T, Takami A, Konuma T, Yanada M, Atsuta Y, Yano S. Maintenance Treatment With Gilteritinib Suppresses Post-transplant Relapse in Relapse/Refractory FLT3-Mutated Acute Myeloid Leukemia. Transplant Cell Ther. 2026 Apr 12：S2666-6367(26)00259-9. PMID：41974308
21. Izutsu K, Fukuhara N, Yuda J, Suehiro Y, Kusumoto S, Casadebaig ML, Suzukawa K, Fukushima K. Tafasitamab as Monotherapy or in Combination in Japanese Patients With B-Cell Non-Hodgkin Lymphoma：Results From the Phase 1b J-MIND Study. Cancer Sci. 2026 Apr；117(4)：1093-1105. PMID：41563911
22. Onozawa M, Kusumoto S, Kuwatsuka Y, Miyazono T, Tanaka M, Najima Y, Okada K, Shiratori S, Sato T, Kanda J, Inagaki Y, Murayama T, Hatano K, Onodera K, Sakurai M, Endo S, Kumode T, Itonaga H, Moriuchi Y, Kanemura N, Imi T, Edahiro T, Fukushima N, Oura M, Yui S, Watanabe M, Toubai T, Ando T, Nakamura D, Tamaki M, Kakinoki Y, Okada T, Nakano N, Tachibana T, Shimizu H, Ota S, Iida S, Sugiyama M, Atsuta Y, Teshima T, Yoshizumi T, Mizokami M. Vaccine-Induced Anti-HBs Response Is Associated with Protection Against Hepatitis B Virus Reactivation after Allogeneic Hematopoietic Cell Transplantation：A Randomized Trial. Transplant Cell Ther. 2026 May 17：S2666-6367(26)00360-X. PMID：42150672
23. Izutsu K, Akahane D, Toubai T, Saito T, Mishima Y, Fujisaki T, Nishikori M, Kumode T, Suehiro Y, Ishitsuka K, Patah P, Takahashi A, Månsson BD, Favaro E, Fukuhara N. Three-year follow-up of epcoritamab therapy in Japanese patients with relapsed/refractory follicular lymphoma in EPCORE NHL-3. Int J Hematol. 2026 May；123(5)：696-707. PMID：41548170
24. Yan Y, Kato H, Sano S, Furukawa E, Ichikawa S, Onodera K, Onishi Y, Fukuhara N, Yokoyama H, Fujiwara T,

Harigae H. Heme synthesis inhibition induces the intrinsic apoptosis pathway in leukemia with OSGIN1 upregulation. Exp Hematol. 2026 May ; 157 : 105401. PMID : 41692271

（リウマチ膠原病内科）

1. Kidoguchi G, Yoshida Y, Omura S, Nakagomi D, Abe Y, Wada M, Takizawa N, Nomura A, Kukida Y, Kondo N, Takagi H, Endo K, Azuma N, Takeuchi T, Fukui S, Kamada K, Yanai R, Matsuo Y, Shimojima Y, Nishioka R, Okazaki R, Takata T, Moriyama M, Takatani A, Miyawaki Y, Shirai T, Dobashi H, Ito T, Matsumoto I, Takada T, Kawahito Y, Ito-Ihara T, Kida T, Yajima N, Kawaguchi T, Hirata S. Phenotype, serotype, and data-driven clustering reveal complementary dimensions of heterogeneity in ANCA-associated vasculitis : a multicentre Japanese cohort (J-CANVAS). Rheumatol Int. 2025 Nov 12 ; 45(12) : 272. PMID : 41222744
2. Katakura T, Shirai T, Ishii Y, Sato H, Yamamoto Y, Murakami K, Miura T, Fujii H. Secondary Pulmonary Alveolar Proteinosis Complicated by Hemophagocytic Syndrome in a Patient with Adult-onset Still's disease : A Case-based Review. Intern Med. 2026 Jan 15 ; 65(2) : 331-336. PMID : 40603093
3. Akao S, Shimizu M, Maruo K, Asashima H, Kondo Y, Ohyama A, Abe S, Kitada A, Miki H, Tsuboi H, Omura S, Nakagomi D, Abe Y, Wada M, Takizawa N, Nomura A, Kukida Y, Kondo N, Takagi H, Endo K, Hirata S, Azuma N, Takeuchi T, Fukui S, Kamada K, Yanai R, Matsuo Y, Shimojima Y, Nishioka R, Okazaki R, Takata T, Moriyama M, Takatani A, Miyawaki Y, Shirai T, Dobashi H, Ito T, Takada T, Kawahito Y, Ito-Ihara T, Kida T, Yajima N, Kawaguchi T, Matsumoto I. Diabetes mellitus and cardiac disease as key predictors of rituximab-induced acute thrombocytopenia in ANCA-associated vasculitis. Rheumatology (Oxford). 2026 Jan 8 ; 65(1) : keaf529. PMID : 41071071
4. Kitayama C, Shirai T, Katakura T, Ishii Y, Sato H, Fujii H. Reversal of chronic arterial stenosis with biologic therapy including tocilizumab in Takayasu arteritis. Mod Rheumatol Case Rep. 2026 Jan 6 ; 10(1) : rxag002. PMID : 41626758
5. Kakuta Y, Li D, Debbas P, Okazaki S, Sawahashi M, Yang S, Iwaki H, Okamoto D, Nagai H, Shimoyama Y, Naito T, Moroi R, Kuroha M, Shiga H, Kinouchi Y, Shirai T, Fujii H, McGovern DPB, Masamune A. Differences in Anti-αvβ6 Integrin Antibody Expression between U.S. and Japanese Cohorts in Inflammatory Bowel Disease. Inflamm Bowel Dis. 2026 Jan 1 ; 32(1) : 130-140. PMID : 41274279
6. Mutoh T, Takahashi M, Fujii H. Anti-Mitochondrial Antibody-Positive Myositis : Analyses of 123 Adult-Onset Cases With Cardiac Evaluation. Int J Rheum Dis. 2026 Jan ; 29(1) : e70543. PMID : 41499320
7. Shirai T, Yoshida T, Sugano E, Hiwa R, Ishihara R, Yanai R, Yajima N, Kida T, Nishioka N, Sakai R, Handa T, Honda M, Ishizaki J, Kadoba K, Kamiyama Y, Kidoguchi G, Kiko T, Kobayashi D, Kobayashi K, Nakagama S, Nakano Y, Sanada H, Tamechika SY, Ueda J, Nagasaka K, Sugihara T, Tamura N, Nakaoka Y. Systematic Review and Meta-Analysis for JCS 2026 Guideline on Management of Large-Vessel Vasculitis. Circ J. 2026 Feb 14. PMID : 41692437
8. Omura S, Kida T, Inoue H, Shimada Y, Nakagomi D, Abe Y, Takizawa N, Nomura A, Kukida Y, Kondo N, Takagi H, Endo K, Hirata S, Azuma N, Takeuchi T, Fukui S, Kamada K, Yanai R, Matsuo Y, Shimojima Y, Nishioka R, Okazaki R, Takata T, Moriyama M, Takatani A, Miyawaki Y, Shirai T, Dobashi H, Ito T, Matsumoto I, Takada T, Ito-Ihara T, Yajima N, Kawaguchi T, Seno T, Kohno M, Wada M, Kawahito Y. Association Between Bronchiectasis and Serious Infections in Microscopic Polyangiitis and Granulomatosis With Polyangiitis From the J-CANVAS. Int J Rheum Dis. 2026 Feb ; 29(2) : e70570. PMID : 41672947
9. Nakaoka Y, Watanabe Y, Sugihara T, Nagasaka K, Tamura N, Yoshifuji H, Yajima N, Aono F, Hashimoto T, Ishizu A, Iida T, Ishii T, Kiko T, Maejima Y, Miyamae T, Nakano Y, Nanki T, Niiro H, Ota H, Okochi N, Sada K, Shigematsu K, Uchida HA, Abe Y, Aoki-Kamiya C, Arita Y, Handa T, Hiwa R, Honda M, Ishihara R, Ishizaki J, Ito S, Iwahashi T, Iwata N, Kadoba K, Kamiyama Y, Kawazoe M, Kida T, Kidoguchi G, Kobayashi D, Kobayashi K, Kurata A, Miyawaki Y, Nakagama S, Nishioka N, Onimaru M, Onishi Y, Sakai R, Sakai R, Sanada H, Shimizu Y, Shirai T, Sugano E, Takahashi K, Tamechika SY, Ueda J, Umezawa N, Watanabe R, Yanai R, Yoshida T, Amano K, Harigai M, Isobe M, Kitaoka H, Tanemoto K ; Japanese Circulation Society Joint Working Group. JCS 2026 Guideline on Management of Large Vessel Vasculitis. Circ J. 2026 Mar 20. PMID : 41866178
10. Ushio Y, Wakiya R, Shimada H, Sugihara K, Omura S, Nakagomi D, Abe Y, Wada M, Takizawa N, Nomura A,

Kukida Y, Kondo N, Takagi H, Endo K, Hirata S, Azuma N, Takeuchi T, Fukui S, Kamada K, Yanai R, Matsuo Y, Shimojima Y, Nishioka R, Okazaki R, Takata T, Moriyama M, Takatani A, Miyawaki Y, Shirai T, Ito T, Matsumoto I, Takada T, Ito-Ihara T, Kida T, Yajima N, Kawaguchi T, Kawahito Y, Dobashi H. Predictors of glucocorticoid-free clinical remission in patients with newly diagnosed microscopic polyangiitis and granulomatosis with polyangiitis : a retrospective cohort study using a nationwide registry in Japan (J-CANVAS). Arthritis Res Ther. 2026 Mar 10 ; 28(1) : 89. PMID : 41803922

11. Shirai T. Autoantibodies and B Cells in Takayasu Arteritis and Giant Cell Arteritis : Comparative Insights into Large-Vessel Vasculitis. Tohoku J Exp Med. 2026 Mar 4 ; 268(2) : 135-147. PMID : 41672504
12. Otomo L, Nakagawa T, Shirai T. Spontaneous resolution in vasculitis restricted to the lower limbs : A report of two cases. Intern Med. 2026 Apr 28. PMID : 42055679
13. Kinjo K, Takahashi T, Fujii H, Asano Y. Adalimumab-Induced Folliculitis-Like Lichenoid Sarcoidosis. J Dermatol. 2026 Apr ; 53(4) : e240-e242. PMID : 41674400
14. Kuwana M, Watanabe S, Takeuchi T, Kaneko Y, Kawaguchi Y, Tanaka Y, Yamaguchi Y, Dobashi H, Ishii Y, Niiro H, Kodera M, Yasuoka H, Atsumi T, Takahashi H, Iwamoto N, Matsueda Y, Isomura Y, Kondoh Y, Tamura Y ; J-STAR investigators. A multicentre, prospective registry of patients with systemic sclerosis in Japan : baseline patient characteristics. Mod Rheumatol. 2026 Apr 13 ; 36(3) : 396-406. PMID : 41211787